

トバタアヤメ：日本、北九州産アヤメの新変種

秋山 忍・岩科 司

国立科学博物館 植物研究部
〒305-0005 つくば市天久保 4-1-1
E-mail: akiyama@kahaku.go.jp

要約 北九州市産の、大輪の花(直径5~7 cm)をつける矮性のアヤメの新変種、トバタアヤメ (アヤメ科)が記載された。

キーワード：絶滅植物、トバタアヤメ、新アヤメ属植物、絶滅危惧植物。

“トバタアヤメ”あるいは“小澤見野の小杜若(コゾミノノコカキツバタ)”として一地方の局地的に知られる未記載種のアヤメが北九州福岡県北九州市戸畑区に現存する。1875年頃にはすでに、このアヤメは福岡県の小澤見野に自生していることが記録されており、その当時、“コカキツバタ”と呼ばれていた(著者不明、1875)。北九州市のホームページ(<http://www.city.kitakyushu.jp>)によると、このアヤメは栽培下で維持されているが、野生個体群は完全に滅んでしまった、とある。未記載種であった理由はエヒメアヤメとして誤認されていたためであるらしい。北九州市戸畑区はエヒメアヤメの自生地の一つとして記されている(大滝、1989)が、エヒメアヤメが北九州市戸畑区に自生しているという報告はない。しかし、最近私たちは“トバタアヤメ”とよばれる、アヤメに似ているが、開花期でも草丈が10~15 cmしかないという、その矮小性(木村、2005)から母種のアヤメとは容易に区別することができた。

日本では2種の矮性アヤメ属植物が知られている。そのひとつが、花の直径が3.5~4 cmのエヒメアヤメであり、もうひとつが花の直径約4 cmのヒメシャガである。これら2種は、外花被片(一般の植物では‘がく’に相当)にトサカ状の突起が存在するか、しないかで容易に区別ができる。すなわち、直径3.5~4 cmの花をつけ、外花被片にトサカ状の突起のないエヒメアヤメは日本、朝鮮半島、中国に自生するのに対し、エヒメアヤメの日本での分布範囲は散在的で、しかも極めて限定的である。そのために自生地のほとんどは天然記念物に指定され、保存されている(佐竹、1982; 大滝、1989)。トバタアヤメは矮性という点と、トサカ状の突起のない外花被片を持つという点ではエヒメアヤメと類似しているが、直径5~7 cmという大輪の花をつけるという点ではエヒメアヤメとは異なる。

アヤメ(それ自身およびバラエティー・イキンゲンシス)は中間的な草丈の種であるが、トバタアヤメの花の色や形態はこれらの植物と区別することができない。‘プミラ *Pumila*’と呼ばれる矮性品種のアヤメが知られていることも注目される(大橋ら、2008)。日本語ではチャボアヤメと呼ばれる‘プミラ’は *Iris nertschinskia* Lodd. var. *pumila* Makino イリス ネルツチンスキア(石井、1949; 津山、1951)、あるいは *Iris sanguinea* var. *pumila* (Makino) Tomino イリス サンギネアバラエティー プミラとも呼ばれている(富野、1980; 大滝、1989)が、これらは矮性であることと草丈とほとんど同じ高さの位置に花をつけるという特徴がある。トバタアヤメでは、花茎は明らかに葉より短く(2~3 cm)、その葉はアヤメおよびその変種であるイキンゲンシス、および品種のプミラ(チャボアヤメ)よりも明らかに細く、短い(長さ10~25 cm×幅3~5 mm)。高速液体クロマトグラフィーを用いた花と葉のフラボノイド化合物の研究で、水野と岩科はトバタアヤメのフラボノイド成分がアヤメのものとは異なっていることを発見した(水野・岩科、未発表データ)。

中国と朝鮮半島には、エヒメアヤメのような紫の花をつける、数種の矮性アヤメが存在する(Qianら、1985; Zhaoら、2000; Lee、2006)。それらの一種で、小輪の花(直径3~5.5 cm)と狭いげん部をもつ外花被片(幅8~10 mm)をつけるコカキツバタ(=マンシュウコアヤメ、マンシュウアヤメ、チベットアヤメ、スミレカキツバタ等の名前でも販売されている)が日本でも栽培されている。甘肅(カンスー)省南西部と青梅(チンハイ)省北東部の *Iris qinghainica* Y. T. Zhan イリス チンハイニカもまた、小輪の花(直径4.5~5 cm)と狭い翼弁がある外花被片(幅5~8 mm)を持つ。甘肅(カンスー)省、内蒙古、寧夏(ニンシア)、青梅省、四川(スーチヨワン)省、新疆(ウイグル自治区)と西藏(チベット)の *Iris loczyi* Kanitz イリス ロツィイ(糸葉アヤメの仲間)は直径5.5~7 cmの花をつけるがその葉は長さ20~40 cmである。また内花被片は長さ4.5~5 cmで花筒は長さ14 cmである。これらのすべての種が

表1に挙げたさまざまな特徴によりトバタアヤメと容易に区別できる。

表1 新しい変種、エヒメアヤメ、ヒメシャガ、コカキツバタ (=マンシュウコアヤメ、マンシュウアヤメ、チベットアヤメ、スマレカキツバタ等の名前で販売されている)、*Iris qinghainica* イリス チンハイニカおよび *Iris loczyi* イリス ロツィイ (糸葉アヤメの仲間) を含むアヤメの仲間の形質の比較

	トバタアヤメ	アヤメ	イリス サギニア 住ガシス	エヒメアヤメ	イリス 肝心カ (= コキカキバタ、マンシュウコアヤメ、マンシュウアヤメ)	イリス チンハイニカ	イリス ロツィイ (糸葉アヤメの仲間)
根茎	匍匐性	匍匐性	匍匐性	匍匐性、細長い	匍匐性、枝分かれ	こぶ状の球茎をつくる	こぶ状の球茎をつくる
葉	線形、1本 (あるいは2本) の明瞭な葉脈、長さ10~25cm、幅3~5mm	線形、中央脈不明瞭、長さ30~60cm、幅5~10mm	線形、長さ30~50cm、幅2~4mm	線形、2 (~4本) の明瞭な葉脈、長さ4~20cm、幅2~6mm	線形、3~5本の明瞭な葉脈、長さ7~25cm、幅1~3mm	線形、中央脈は無い、長さ7~25cm	線形、中央脈は無い、長さ20~40cm、幅約3mm
花茎	2~3cm、2あるいは3枚の葉をつける、2個花をつける	30~60cm、2~4枚の葉、2、3個の花	40~60mm、1、2枚の葉、1、2個の花	5~15cm、1~3枚の葉、1個の花	2~20cm、2、3枚の葉、1個の花	幅2~3mm、地表には現れない、1、2個の花	無いかわずかにだけ地表部に現れる、1、2個の花
苞 (ほう)	2個、やや白く、およそ2cm×8mm	2個、緑色、4~7cm×10~15mm	2、3個、外部は赤茶けて、内部は青みを帯びた白、6~7cm×7~9mm	2個、緑色、4~7cm×5~8mm	2個、緑、縁は赤紫、2~3.5cm×8~10mm	3個、緑色、6~10×6~18mm	3個、10~15cm×約15mm
花の色	紫色、しかし時に、淡紫あるいは白色	紫色	紫色	青みがかった紫~青紫色	青紫色	青紫色	淡青紫色
花の大きさ	5~7cm	7~10cm	5.5~6cm	3.5~4cm	5~5.5cm	4.5~5cm	5.5~7cm
花筒	およそ8mm	およそ8mm	とても短い	4~6cm	5~15cm	3~6cm	14cmまで
外花被片	倒卵形、約3.5cm×幅約16mm	広倒卵形、3.5~5cm×幅2.5~3.5mm	広倒卵形	狭倒卵形、約3cm	倒皮針形、長さ約4cm×幅8~10mm	狭倒皮針形、3~3.5cm×幅5~8mm	倒皮針形か狭倒卵形、約6cm×幅1~2mm
内花被片	直立、長楕円状倒皮針形、長さ約2.5cm	直立、長楕円状倒皮針形、長さ3~5cm	直立、長楕円状倒皮針形	直立、楕円、約2cm	直立、狭倒皮針形、長さ約2.5cm	狭倒皮針形、長さ約3cm	倒皮針形、長さ4.5~5cm
雄しべ	約2cm	2~2.5cm		約1.5cm	約2.5cm	1.8~2cm	約2.5cm
子房	約12mm	約12~17mm		約10mm	約10mm	約15mm	約12mm
花柱	長さ約2.5cm、先は二裂	2.5~3cm、先は二裂		約2cm、深<二裂	3.5~4cm	約2.5cm	約4cm

分布	日本(北九州)	日本, 朝鮮半島, 中国北東部, 東シベリア	浙江省(フョーチン)	日本, 朝鮮半島, 中国(遼寧省東部)	朝鮮半島, 中国, モンゴル, ロシア, カザフスタン, ヨーロッパ東部	中国(甘肅省南西部, 青海省北東部)	中国, モンゴル, ロシア, アフガニスタン, タジキスタン, イラン
----	---------	------------------------	------------	---------------------	--------------------------------------	--------------------	-------------------------------------

トバタアヤメとアヤメは種としては同一とみなされるが、その大輪の花、小さい葉、および短い花茎(図1および2)からトバタアヤメをアヤメの一変種、*Iris sanguinea* var. *tobataensis*として区別し、ここに記載する。その種小名トバタエンシスは基準産地の戸畑にちなんでいる。

学名: *Iris sanguinea* Hornem. var. *tobataensis* S. Akiyama & Iwashina, 新変種.

[図1および2]

図1 *Iris sanguinea* Hornem. var. *tobataensis* S. Akiyama & Iwasina(トバタアヤメ)の正基準標本 [日本 福岡県植栽, 岩科 司, 2009年4月27日, 国立自然科学博物館(TNS)]

図2 福岡県北九州市で植栽されているトバタアヤメ, 2009年4月撮影

(ラテン語記載)

基準産地: 日本 福岡県北九州市 戸畑あやめ公園植栽 [岩科 司, 2009年4月27日, 国立自然科学博物館-正基準標本(TNS)].

草本、多年性植物。根茎はやや匍匐性。根はやや白色味を帯び、繊維質。淡褐色の茎は基部に繊維質の残存物。葉は線形で、1あるいは2本の明瞭な葉脈があり、長さ10-25 cm、幅3-5 mm。花茎は開花期で高さ2-3 cmで、開花後長くなり、2あるいは3枚の葉をつける。苞(ほう)は2個で、やや白く、およそ2 cm × 8 mm、膜質。小花柄は長さ1.5-2 cm。花は普通2個つけ、紫色、しかし時に、淡紫色あるいは白色、直径5-7 cm: 花筒の長さは約8 mm: 外花被は広く、げん部は紫色で約3.5 cm × 16 mm、基部は白あるいは黄色で暗紫色の脈がある。内花被片は直立し、紫色、長楕円状倒皮針形、長さ約2.5 cm: 子房は長さ約12 mm: 花柱は3つに分かれ、長さ約2.5 cm、先は二裂し、細かい小歯状突起がある。開花期は栽培下では4月下旬から5月中旬。

自生地: 栽培下でのみ知られている。

分布: 日本、九州、福岡県 北九州市戸畑区(基準産地でのみ知られており、野生としては絶滅)。

謝辞

私たちがこの珍しいアヤメを研究する機会を得ることができたのは北九州市在住の常守和明氏のご好意によってであり、ここに謝意を表します。またこの植物の各種の情報を提供していただいた木村晴彦氏および清水弘氏(日本花菖蒲協会)にも謝意を表します。私たちはまた、有意義な助言とラテン語の添削をして頂いた、東京大学名誉教授、大場秀章博士、さらには英文の校閲をして頂いたハーバード大学植物標本室のDavid E. Boufford博士に感謝致します。また、私たちに標本の使用を許可して下さいました東京大学植物標本館職員一同にも感謝を表します。

引用文献

省略